

認知の余話

中西 卓

長谷川先生は優しい家族に囲まれてお幸せの様子、私の場合は全く違う。「奥様はお元気ですか」と尋ねられて「はい、口だけ達者です」と答えることにしている。嵐の中で暮らしてると言えば言い過ぎかもしれないが、とにかく厳しい。うっかりなことを言えない、曲がった背を叩かれても、夕餉のご馳走に何よりの感謝、優しい連れ合いでは凡庸な夫のMCIが認知に加速するかもしれない。前稿で述べなかった私的な、ご本人に聞こえれば怒られるかもしれない話をHPを借りてさせていただく。

一話 本来プレスマンのMさん。万年筆で書きなぐりの年賀状、でも活字だけのより嬉しい。記事を書くより杯を傾けながら話すのが得意。特技を生かして読者を倍増し、大阪本社部長のあと岡山に戻ってカルチャー教室を立ち上げた。15年前Mさんに誘われてタイへ、永瀬隆*像の除幕式ツアーで1週間一緒に旅をした。クアイ河畔カンチャナブリのリゾートホテルで4泊してミャンマー国境まで、クアイ河マーチの鉄橋も歩いた。このツアーは元首相H氏夫人が、除幕式の主賓の一人として、対面鉄道を世界遺産にしようと現地有力者と組んでタイ政府に請願のために参加。バンコクに戻って3回の夕食を夫人と秘書、Mさんと共にし、飲み物をご馳走になった。その半年後に元首相が逝去。ファーストレイディの趣にふれる得難い体験はMさんのお陰だった。

* 泰緬鉄道建設時に連合軍捕虜拷問で通訳に従事。悪業を償うために寺院を戦跡の村々に建てたのと、多くの若者を日本に留学させた功績に感謝した人達が永瀬さんの全身像をクアイ河畔に建立した。

10余年後からMさんは徘徊老人になって、竹の子の家という老幼ハイブリッドのデイサービスへ2kmをひとりで毎日のように往復しています。時折帰る道が分からなくなるのか、GPSの端末を持たされて家族が追跡していますが交通事故に遭わねばよいがと願っています。

二話 京都府立網野高校から高津へ転入学したY君。私が舞鶴から大阪へ転勤したとき、上六で会計事務所開いていたI君ら6人の仲間にYがいた、45年前のことである。丹後の名山・酒呑童子(赤鬼)で知られる大江山、秋のすすき原の素晴らしさなど共通の話題があった。彼は東京商船大学へ入ったが1年後に航空大学校へ、海よりも空を飛びたかったようだ。主としてヨーロッパのあと、退役前はオーストラリア・NZの南北航路に。ベテラン機長は燃費節約のため満タンにせず離陸すると言う、荒天時着陸予定地が変わると残り燃料が心配で、ジャンボ機体と乗客の命を預かる一切が自分にかかってストレスになる。ベトナム戦争のときは1万mの高空から艦砲射撃を見物

した、勤務の合間に旧ボルネオのキナバル山に登ったことなど、世界を股に掛けた男の話だった。リタイア後は2人で別府航路を往復、普通は入れないブリッジで船長に挨拶し夕陽に映える明石海峡大橋を眺め、レンタカーで九州一周の旅を楽しんだ。私の俸が屋久島勤務のとき、5日ばかり滞留して縄文杉、宮之浦岳などに雨中登山した。

西宮・広田神社近くの住まいを訪ねたこともある。こんなに親しくしていたYとコミュニケーションが途絶えたので電話したら、施設に入りましたと夫人の話。阪神電車・武庫川橋上駅で支線に乗り換えて彼を訪ねたら ゆったりした一人部屋のベッドに横たわっていた。呼べど応えず、「Y来たぞ、俺やで、わかるか」と何回言っても分ったのかどうか？ 仕様がなかったので入口にあった歩行器に彼の身体を委ねて地上に降りた。100mほど歩いてスーパーの前に日除けとベンチがあったので、腰をおろしてアイスクリームとバナナを食べた。会ってから30分ほど経って何となく誰かが分かったような気がしたが、そこまでだった。こうなっては親しかった友達も心が通じない、人間でなくなっかとしみじみ思った。後日夫人に報告したら「今後は・・・」と辞退された。

「呆けたらお終いと言わないで」と先生のお話だが、現実は難しい。

(終)

2021.9.3 8/31 付拙稿の補足 中西 卓@岡山